

那覇市立金城小学校校内授業研究会

(1) 単元名：音読はっぴょう会をしよう。

「かさこじぞう」 岩崎京子 (教育出版)

(2) 本時の目標：(四)の場面の様子や、じさまやばさまの気持ちを想像し、音読のし方を工夫する。

一学期の6月19日、4年生算数の授業研究(リフレクションシートNo.150)から、今年度2回目の訪問である。前回の訪問では「金城小2年目の改革の壁」について、研究協議会でお話しさせてもらった。今回は2年生で国語の文学教材「かさこじぞう」である。大勢の先生方に見つめられる中、2年生の純真な言葉が先生方の頬を緩める。



研究授業後の全体協議会の前に、2学年会の協議に参加させてもらった。実に和やかな雰囲気、教師が互いに素直な言葉で日常授業の「分からない」や「困り感」を語っていた。「教師が互いに支え合い、困り感を素直に出せる職員室」が、同僚性を高め研究を深める。全体協議の時の先生方の表情もかなり柔らかくなってきた。2月の佐藤学先生の訪問を控え、さらなる改革の前進が期待できる訪問であった。

[デザインシート授業者より]

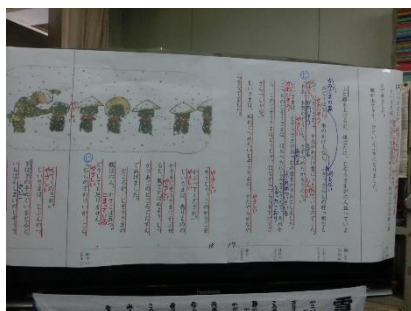
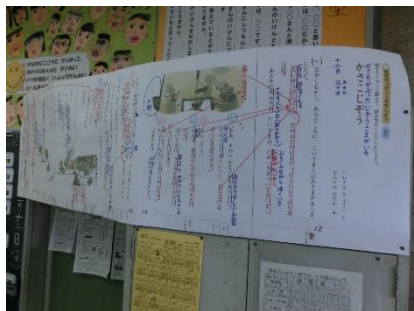
これまでの国語の学習では、一斉読み→一人読み→書き込み→ペア学習→全体での共有という流れで行ってきた。今回の学習では一人読みから→ペアによる交互読みという流れを取り入れることで一人ひとりの学びのペースを大事にしていきたい。

全体場で「分からない言葉」を訊く児童は増えてきたが、「自分の考え」を伝えられる児童はまだ少ないのが正直なところです。

とくに本時は、全体の共有の場とペア学習の反復の回数を増やすことによって、「気づき」の機会を増やし、一人ひとりの発想や想像に広がりや深まりを持たせるように授業を展開し、作品の楽しさを味わわせたいと考えている。



[学びが可視化できる教科書の拡大版]



お話の「この部分から人物のこんな気持ちがわかる。」「だってここにこう書いてるもん。」等、お話の中の登場人物の気持ちや、自分の考えの根拠や理由となる文章を叙述に沿って視覚で確認することができる。さらに、授業の振り返りや、お話の前後の比較など大型教科書は子ども達の学びのツールとして有効的であると考える。

教師は、子ども達のすべての考えを記すことが目的ではない。大切なことは、このツールによって、子ども達の学びに「広がりや深まりを持たせることができたか」が肝心となる。例①、「〇〇はなぜこのような言葉を使ったのだろう？」ペアやグループでお話してみよう。例②、「〇〇が悲しんでいることはどこからわかるの？」

学びを深めるための教師の側の「問い(発問)」の準備は大切である。しかし、普段の授業で子どもたちの中から自然発生的に出される疑問は、教師の発問以上に学びを促進させることは多々ある。この時教師はつねに「子どもの疑問はまず、仲間に『つなぐ』、つないでみる。」ことを意識してほしい。

[かさこじぞう(笠地蔵) 東北地方岩手県や福島に伝承されるおとぎ話]

貧しいが心の清い老夫婦が道端の地蔵尊に管傘をかぶせてその恩返しを受けるという物語である。この話は「花咲か爺」「舌きり雀」のように、善悪という対比的な図式を用いず、純粋に正しい行いをするものは救われるという展開になっている。これは仏教思想の観念に基づくものであり、親が子に語り継いでいくことで道徳の教を諭すというような要素を持っている。文学教材の「昔話」等には、必ず人が生きていくうえでの道徳的価値が描かれている。何も持たず帰宅したじいさまを、責めることもせず「それはよいことをなすった。」と受け入れるばあさま。・・・あなたは？



【音読する 一人読み→ペアによる交互読み】 授業者の意図は、一人ひとりが自分のペースでじっくり読めるように配慮しての一人読みである。「交互読み」は読みの交流の機会を増やすことで、少しでも他者の考え



や「読み」に広がりを持たせその子にとっての「学び」の機会を増やしていきたいという授業者のねらいがある。



自分たちで役割を分担し、躓く読みは互いに支え合い、素敵な読みの声が教室にし

っとりとした空気を創りだす。子ども達の互いの「読み」の息づかいに参観者も暖かな眼差しが注がれる

【教科書への書込み】：「読み」の後は、各々で書き込みである。当然、書きながらも「互いに訊き合い・支え合う」、どのペアやグループを見てもまったく違和感なく「きき合い・支え合う」が成立している。



左写真、一斉にテキストに向かうしばらく沈黙が教室を包む。



写真②

写真①、男の子は読みの段階からテキストにサイドラインを入れていた。この後も隣の女の子とブツブツボソボソときき合っていた。写真②男の子に寄り添う女の子、このくつき具合が最高である。分からない仲間の声や、自分と違う考え方に、親身になって寄り添う姿、訊ている側に躊躇する余計な気遣いは感じられない、両者の関係がいいから成立するシーである。写真③、ここでも男の子が訊く「いろいろってなに？」テキストの挿絵を使って説明する女の子。



写真①



写真③

低学年の頃から、課題やテーマ、問題や問い(発問)を、ペアや仲間にあ

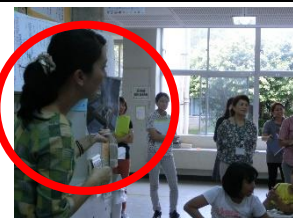
ずけ、仲間が仲間同士で互いに支え合い解決に向かおうとする行為は、未来に向かって子ども達に身に付けさせたい一つの能力である「関係づくり」と「対話的コミュニケーション能力」の力を育ててくれると考える。その力は、子ども達が将来「豊かな人間らしい生き方」を獲得するために、大切な「生きる力」の根底を支える力になると私は考える。

現実の社会的問題として大人や子どもの「ひきこもり」がよく話題として取り上げられるが、当事者たちが一番苦手としているのはなんだろうと考えたとき、近隣の人達との関係づくりであり、それらと関わるための「対話的コミュニケーション」の欠如ではないかと察することができる。

彼らは、他者と関わるための言葉や気遣いを持ち得なく、「対話」と「関係づくり」からの逃避にこだわり、逆の立場から自己の存在を訴えているのではないだろうか。・・・さてこの子達の未来は？

【素朴な疑問】

「いろいろってなに？」沖縄の子にとって当たり前な疑問というより、ほとんど存在しないモノであり、「見たことない」が当たり前のものである。黒板の前で「いろいろのふち」について議論する二人。授業者の



【いろいろを写真で説明する授業者】



「さすが」がひかる。なんといろいろの写真を準備していたのである。

右の写真、食い入るように写真に注がれる子ども達の視線。

モノは大事である、今日の授業ですべての視線がそろった瞬間でもあった。素晴らしい！



Y・N先生素敵な授業ありがとうございました。純真無垢な子ども達の目線をいつまでも大切にしたいですね。これからの金城小のすべての先生方で見守り、未来へつなぎたい「今」です。

# 『一人残らずすべての児童が「安心」して過ごせる学校』

## 《 教師達へ 》

国頭学びの会ゆい

学校の機能（システム）は、「子ども達のために」向けられて初めて学校の目的と役割を担うことができたこととなる。多様化する各家庭の中で、我慢や辛さを強いられてそれを乗り越えて学校に「安心」と「私の居場所」を求めて登校してくる子もいる。普通という言葉は基準として設定されるが、その「普通」の基準レベルも家庭において様々である。さらにその普通を超えた特別な例外も存在することを受け入れる必要があり、その事実を受け入れる教師の器が要求される。

学校は「人格の形成、平和（安心）で民主的（平等）な国家（学校）の形成者の育成」を目指して子ども達が健やかで豊かに育つ場所であることが大前提である。しかし学校や教室がその目的や理念からゆがめられ、「教師にとって都合のいい経営」に向けられたとき、その学校と教室は困難を抱えることになる。（教師のアポリア、教室のジレンマ）

単純に賞罰で子ども達を動かしたり、教師の威圧や、集団行動を名目にした統制型の指導は、指導した教師の目の前でしか通用しない。翌年に子ども達を任せられた教師には苦労だけが引き継がれることになる。中学校に行ったとき「威圧」や「怖さ」による統制はかえって生徒の反発を招き、生徒の心を真逆に刺激してしまう（中学校の教師達の嘆きとなる。）

学校に通うすべての子ども達が安心してその苦難や嘆きを語り（心を開き）、教師や保護者、地域の人がいっしょにその困難の解決に向かい、互いが成長し合えるそんな「安心」できる学校創りに正面から向き合うことを教師の使命の一つと考えたい。

そのために以下



- ☆ 子どもの「家庭」の愚痴をこぼさない。  
子どもの現実を受け入れる。
- ☆ 家庭でできないから学校がある。  
家庭の困難を学校で乗り越える。
- ☆ 弱い子どもの背景には、さらに弱い親がいる。  
親の弱さから子どもを引き受ける。
- ☆ すべての子どもを受け入れる。  
すべての職員が受け入れる。
- ☆ 学校のおかげで育つ子を見とどける。  
成長を語れる教師になる。
- ☆ 「注意！」よりも「声かけ」を心がけましょう。